

No.3
2005・5・20

編

amu

自然・人・地域文化を
編む

【企画・発行】
『白神の夢』と文化を育む会
【後援】
八森町公民館

【あむ 編む】
1 糸、竹、針金、髪などを互い違いに組み合わせて、形の有る物を作る『セーターを一』。
2 多くの材料を集めて本を作る。編集する。『文章を一』。
3 関係各方面の事情を調べて、計画を立てる。『旅行日程を一』。

特報

万博2005
「愛・地球博」

「自然の叡智」PRコンテンツに採用 『白神の夢』短縮版

“この映画は現代社会における自然と人間との関係の有りようを見直し、進歩や退歩という次元とはまったく異なる新しく普遍的な概念を探るヒントを世界中の人々に提示する映画となるであろう。”

“『白神の夢』の思想的前衛性がまだ論じられていないのが残念です。ボクが知らないだけなのか？”

“この映画は人類の未来にとって極めて大切な哲学と理念を伝えてくれた作品であり、国内ばかりでなく、世界に向けて発信すべきである。”

以上は『白神の夢』についての三者の評価である。最初は、本紙編集者 amu の編集・発行人で、『白

神の夢』と文化を育む会 代表の
奈良沙冬子氏の製作段階での評価、二番目は、小池征人監督の師

れた本邦初の英語版上映会を鑑賞された国際教養大学の中嶋嶺雄学長の評価である。このような

『白神の夢』愛知万博で上映へ！



代表 山下 勉

白神の映画をつくる会

匠でドキュメンタリー映画の巨匠である土本典昭監督、二番目は去る1月23日に八森町で行わ

評価を得られたことは、私達の製作意図が充分伝わった証である。と心から嬉しく思う。お陰様で

『白神の夢』は八森町での上映を皮切りに秋田県全域、岩手県、青森県、関東、中部、関西、中国、九州、沖縄など全国へと拡がりつつあるが、更に多くの人々に映画の製作意図が伝わり、様々な議論が深められることを期待しているところである。

そしてここに前述の評価を証明するかのようになり、更なる発展に向けたチャンスが訪れたことを御報告したい。現在、120ヶ国が参加して愛知県で開催中の「愛・地球博」で『白神の夢』の短縮版が上映されることになったのである。実は、2年前に日本経済新聞に取り上げられた私の投稿記事を読み、東京の千代田公会堂での上映会に足を運び大変感動して下さった兵庫県姫路市在住の方が、姫路でも上映会を開催すべくその協力者を募るための試写会

を行なったのだが、そこに参加したある方から、愛知万博関係者の紹介を受けたのが事の始まりであった。万博関係者の

愛・地球広場のコンセプト

愛・地球広場は、愛・地球博のテーマ事業として、博覧会のテーマ「自然の叡智」を表現するために、主催者である博覧会協会が企画・実施する事業です。さらに愛・地球広場は、テーマ事業の中でも、博覧会の事業コンセプト「地球大交流」を具現化する役割を担っています。こうした背景から、愛・地球広場で実施するコンテンツは、「世界の人との交流」を主眼に、世界の多様性を理解しあうとともに、家族や地球を愛する気持ちは共通であることを感じてもらうことを目的として制作、編成しています。

(協会資料より抜粋)

方々は、昨年10月の八森町町制50周年記念上映会に続き東京農大での上映会にも来られ、『白神の夢』が万博のテーマとなっている。『自然の叡智』に沿った格好な映画であると評価して下さった。その後、財団法人2005年日本国際博覧会協会が検討を重ねた結果、『白神の夢』の短縮版を作製し、愛知万博「愛・地球博」で上映されることとなった。また『白神の夢』本編をDVD化して販売してはどうかとの誘いも受け、現在調整段階に入っている。私達はこれを世界に向けて発信できる格好の舞台と受け止め、対応してきたところである。

愛知万博での『白神の夢』上映がもたらす意義は、八森町をはじめ、秋田県、そして私達「白神の映画をつくる会」にとっても極めて大きく、まさに真の白神の夢の

上映会主催者だよ

2005年1月15日

会場 / 秋田市文化会館

「白神の夢」秋田市上映会、大盛況！

白神の夢をひろめる会

代表 蒔田 明史

1月15日、秋田市では初めての本格的な「白神の夢」上映会は、好天にも恵まれ、多数の観客を得て成功裡に終えることができた。今回の上映会は、市民や学生で「白神の夢をひろめる会」という実行委員会を作り、みんなで苦労しながら実現することができた。上映2週間前となる年末になって、なかなかチケットが売れず、かなりヤキモキしたものの、直前になって売れ行きも伸び、当日券で来場してくれる人も結構多く（これも秋田らしさ）。一時は会場に入りきれないだろっかと心配するくらいだった。ポスター貼りもとより、テレビ、新聞、ラジオ、ネットには駅前のビラまきなどいろいろなことをやった。私はこの映画のこ

実現に向けた大きな第一歩となることだろう。
今後ともご支援を!!
(やました つとむ) 『白神の夢』プロデューサー)

『白神の夢』短縮版(17分)
は万博長久手会場、愛・地球広場の大型スクリーンでお昼12時38分から下記のスケジュールで上映されます。

| | | | |
|------------------|--------|--------|--------|
| 5月 | | | |
| 5 (木) | 11 (水) | 24 (火) | 31 (火) |
| 6月 | | | |
| 7 (火) | 14 (火) | 22 (水) | |
| 7月 | | | |
| 5 (火) | 12 (火) | 19 (火) | 26 (火) |
| 8月、9月のスケジュールは未定。 | | | |

とを初めて見たときから、絶対に実行委員会を作って自主上映すべき映画だと思っていた。口コミで人々のつながりを紡ぎながら上映会を成功させるという過程こそが、自分たちが住んでいる地域のことを見つめるといふこの映画のテーマに即したものではないかと思つたのである。

2月5日には、一般来場者の方も含めて「白神の夢を語る会」を開き、小池監督・山下プロデューサーにも来秋してもらい、共に語り合う機会をもつた。いのち・地域・生き様など様々な場面に對するいろいろな意見が出てきたし、監督が映画の中に用意された「伏線」について熱く語ってくれたりして、大いに盛り上がった。

このように、秋田市上映会は十分な成功を収めることができた。ただ一つ残念だったことは、来場者に高校生や大学生が大変少なかったこと。本当はそうした世代にもっと見てほしかった。しかし、当日スタッフとして、県立大、秋田大、経法大など多数の学生が参加してくれた。彼らの今後の活躍に期待したい。「白神の夢をひろめる会」は、上映会の成功で一定の役割を終えたわけだが、今後は今回得られたつながりを大切に、メンバーそれぞれの想いを語り合う機会を設け、「白神の夢」を私たちそれぞれが住む「地域の夢」へ、そして「自分の夢」につ

ないでいける場にしていきたいと思つている。もちろん、どこかで上映会をしたいという人がいたら、その応援もします。最後になりましたが、上映会当日には、監督への花束贈呈をしていただいた佐藤トシさんをはじめ、八森町からもたくさんの方にこ来場いただきました。感謝します。

(まきた あきふみ) 秋田県立大学 生物資源科学部)

英語版上映会 アンケートより

2005年1月23日 八森町文化ホールラファグにて開催

【国際教養大学】
映画のどの部分も全体の流れの中では大事であるとは思いますが、上映会でより多くの人に見ていただくには、もう少し短い方がいいのではありませんか。

(前中ひろみ)
木を植える場面にとっても感動した。人の手で生まれる自然。そして、その自然の恵みで生きる。本当の意味での「共生」がこの町にはあるのだと思つた。子どもやお年寄りのかげらない、自然な笑顔が白神と同じくらい素敵だった。

(立川 真利子)
今回の上映で知識を得るだ

けでなく、自然の中で生きる人間のあり方について学ぶことができた。

(福井 絵留子)
この記録映画を観て、生まれ故郷の室に気付く事、それを守る事の大切さに気付かされました。(フルトジン・ダシニヤム モンゴル)

数年の後、この価値ある映画は私たちの自然保護への行動に對する自然の変化を見せてくれることでしょう。(フルマー・スルガー モンゴル)

一般

「白神の夢」が命や悠久の大自然の営みや共生を問いかけるものになったことは、山下さんや小池さんの情熱があつたからこそ、またすばらしい生き方があつたからこそと改めて心打たれました。

(森田 本子)
映画を見る人の意識によって各テーマに對する反応は異なると思つた。総じて白神山地の麓に生きる八森町の人々の姿勢に共感し、感動している。白神山地の自然の中で生活することの厳しさ、大切さ、素晴らしさをストレートに伝えてくれる映画だと思つた。(中略) 秋田県における地域活性化のモデルケースとしてこの映画の舞台がそれぞれの市町村に置き換えて見ると、そのまま我が町の映画として見ることができると思つた。(池田 孝)

八森のアイヌ語地名を訪ねる 二

ルーテル学院大学 藤井 英一

連載 ちいきがく 知・域・楽

八森は山菜の宝庫だが、春の訪れを知らせる山菜の代表はパツケだろう。東北北部ではフキノトウのことをパツケ、パツケヤ、パツケイ、パツカイ、パケなどと言つが、この方言はアイヌ語の pake(頭)あるいは pakay(子供を背負つ・アイヌのおんぶは子どもを着物で包んでから紐を巻き付けて背負う)に由来するらしい。pakeは雪解けを待ちきれずに「頭」をもたげる姿を、pakay は藁が幾重にも若葉で包まれ、丸くなっている様子が「背負われた子ども」を連想させ、どちらの説も面白い。

さて、菅江真澄が文化四年(一八〇七)に八森を訪ねた日記「おらがの滝」に興味深い記述を見つけた。内田・宮本編訳「菅江真澄遊覧記4」には、(一) 樺の浦に来て、「ここにもむかしは海樺(つばき)の森があつたが、たぎぎとして伐りつくして一本もなくな

り、ただ浦の名としてのみのこつている。」(2) 泊川の岩屋の不動尊について、「雪の深いころ、浜田の岩屋に鹿が群がってきて、餌が乏しかったからだろう、不動尊の御頭をはじめ、まわりをかじつて、その形ともみえないようにしてしまつた。」とある。

樺、樺台、樺岬、樺川、樺山と「樺」の付く地名は全国に多い。東北の樺地名を調べてみると、中世にはすでにその名が使われているもの、縄文遺跡が近くにあるものがある。これらは全て花の樺に由来する地名なのだろうか。ことはそう簡単ではない。伝えられていた発音が tubaki に近いものでしたので「樺」の漢字を与えたという可能性も否定できないのである。秋田雄和町には樺川、樺台の地名があるが、「川は台地の断崖(ツバケレ、崩れる地)を縫つて流れ、ツバクレ川・樺川とも称し、地名の由来をなす。」(雄和町史)といつ。さらに、西鶴定嘉著「東北六県アイヌ語地名辞典」には、もう一つの語源解釈がある。tubaki-dai はアイヌ語の topa(鹿の群れ)・ni(〜の)・tai(森)に由来するといふのだ。もちろん

男鹿市樺、青森平内町樺山、深浦町樺山のように、江戸期から現在までヤブツバキが群生し、漢字地名の意味を裏付けているものもある。

さて、話を八森町の樺と樺台に戻そう。真澄が来た19世紀初頭の100年前、すでにその時、八森のツバキの森が姿を消していたことが記録に残っている。古資料によれば、17世紀初頭から八森で大規模な製塩が始まつたために継続的な薪伐採が必要となり、18世紀末には八森の里地里山から多くの雑木林が失われていたといつ(八森町誌)。鹿の食害で深浦の樺が大被害をうけたと伝える真澄「外浜奇勝」や前述の鹿に食べられた岩屋の不動尊の話もある。

地名や古文書の伝えるところによれば、江戸時代、この地に暮らす人々は、山林の雑木を伐り尽



八森のパツケ(ふきのとう)

撮影=藤井 英一

くしていたようである。山に餌が少なくなれば、鹿は里に降りてくるのである。現在問題になつている里地へのニホンザル、ツキノワグマの出没は、山の豊かさを破壊

してしまつた人間側に責任があると思えてならない。雑木林の再生への歩みだしは急務である。(ふじい えいいち)

新企画

エッセイ 「地人の愛」

ジモチー 地元人による地球人のための愛と憂いのエッセイ

「母さん、この魚なんだっけ？」
「ハタハタよ！」

スーパーの鮮魚コーナーの会話であった。・・・耳を疑つた。振り返つた。見据えた。ハタハタを知らない子供が存在すること自体びっくりした。だがその後の言葉には訛りがある。このガキ、紛れも無く秋田県人だろうが・・・。ハタハタが多く獲れていた昭和40年代、海鳥が騒ぎ真つ白く泡立つ岩場に立ち、当時は許されていた「ワツカ網」でハタハタを獲つた。寒風に向かい、時には頭から波をかぶることもあり、ほっかがぶりをしている手ぬぐいで海水

山本 優人

魚食伝承

とも鼻水とも判別できない塩辛さを感じながら顔を拭き、再び沖へ向つてワツカを放り投げる。大人の半分にも届かない距離に落ちて、運が良ければワツカに数十匹入りこの繰り返しを数時間も続ける。ほどほどにして切り上げて、帰りは数十箱のハタハタのほか岩場に「落ちているハタハタをもつた」といふと枝に刺し、滑る岩場をハタハタ抱えながら慎重に歩いた。リヤカーからこぼれ落ちたハタハタの白子の滑りで泥沼になったケド(道)には、落ちて茶色に染まつたハタハタが散らばり、これさえ拾おうにも行き交つりヤカーの多さで諦めた。帰る早々母はハタハタをジャップ板の上で捌き、頭・

会 員 募 集 中 !

『白神の夢』と文化を育む会では、会員を募集しています。地域・年齢、性別は一切問いません。

地域作りに興味があり、アイデアを持っている方

『編 amu』の紙面作りに参加できる方

仕事以外にも自分の世界を広げて、多彩な人間関係を築きたいと思っ

ている方
など、理由はどうであれ、好奇心旺盛で意欲的な方を求めています。地域を面白くするために私達と一緒に何かやってみませんか？

カマ・白子・身に分別する。見る間に樽が一杯になり血抜きする。為に水を張る。一度では血が抜かず二度も三度も水を入れては捨ててまた新しい水を入れる。当時は各屋で必ず行っていたハタハタ寿しの工程であった。ハタハタ寿しを漬けないと蔵冬から春にかけての魚蛋白が持たないのであった。お陰で少年期は朝飯に干物のハタハタ焼き、昼は塩漬けのハタハタ焼き、夜は豪華にハタハタの寿司にしょつたる鍋。そして我が家自慢の白子塩辛、とハタハタのフルコースが連日の献立で、兄の弁当のおかずはもちろんハタハタの焼き物であり、我ら兄弟の血や骨を形成したハタハタ神(鱒様)なのであった。これこそが神の魚たる由縁と言える。あれから40年、今は電子レンジでチンするだけで血に盛り付けられ、まな板・出刃・魚焼き器さえ無い家庭が多くなり、近い将来にはポタンを押すだけでお好みの食材

が冷蔵庫からレンジ・食卓・開けた口へと自動的に運ばれる時代になるかもしれない。
魚の姿形も知らずに育った子供らは大きくなくても魚を捌けず、その調理法さえ知らずに自動的に出てくる料理に満足し成長していくのだから。魚食文化とは魚を捌く体験を通じて魚の構造を知り、捌き方や美味しく食べるための味付けの方法を工夫することであり、又、箸を使って上手に骨と身を取り分ける器用さ、口のなかで小骨を選び分ける口技等々高度な知識と経験が必要なことだと思ひ知る。普段この過程を何気な

身上書 ~其の2~ (会員自己紹介)

山本 優人 (やまもと ゆうと)

年齢 = (それなり) 職種 = 魚類価値評価分析整理業 趣味 = 電子画面打刻作業満足遊戯

「たまぐら(ミズ)」と人は言うが、その通りだと思う。楽しい町の原点は何か付けて活気があるものだが、自分の住む土地の人付き合いが豊かであれば、色々な楽しい事も集まってやれるし活気も出てくる。チマチマと楽しいことをするために動き回り、時にはヒョコリ顔を出して意見も言う。ミズは地を肥やし土地を豊かにするのだと思えば、「たまぐら」の愛称もそんなに悪くはない。

くこな し、食膳に供される魚料理を作っている妻達は「魚食士」の称号を与えるに値すると思

秋田には気候風土に合った魚食文化がありハタハタはその最たるものである。秋田県人として自らの健康維持のために、一匹丸ごと使えるハタハタの利用法(頭はしょつたる、身は寿し・糠漬け・塩漬け・干物、ワタは塩辛)を覚え、食する秋田の食文化の持

うが、どうだろうか。

日本人の身体は数千年の時を経て魚食に適合するように作られてきたが、戦後欧米型の食事に憧れ急に肉食が増えたことによつて、消化器系の病気や成人病そして子供は肥満が急増している。全国民同じ食材の季節性の無いサケ・サンマ・カツオを食い、同じ病気になる。日本人本来の旬の食材を食す伝統の魚食文化を軽んじたことへの警鐘であると思ふ。

続・継承が大事である。

(やまもと ゆうと)

お 詫 び

第2号「坂田さんからの年賀状」について

イラストとキャプション「ミジンコ」は「ミジンコ」をしている。皆さん、ちゃんと人間をしていますか？(これは編者による加筆であり、坂田明氏の年賀状にはありませんでした。ご本人から「勝手に人の年賀状に手を加えるな！」と指摘されて、深く反省しています。編集者として配慮不足であったことを認め、以後このような誤解を招くようなことは慎む所存でございます。ここに「イラスト・キャプション」=奈良沙冬子」と訂正しお詫び致します。

編 集 後 記

HP開設しました！

中身は少しずつ充実させていきますので、時々アクセスしてみてくださいね。

<http://www.shirakami.or.jp/~satoko-n/>

『編 amu』への「意見」感想を下記連絡先までどしどしお寄せ下さい。投稿も受け付けます。400字程度でお願い致します。掲載前にご連絡致しますのでお名前、電話番号を明記して下さい。面白い情報がありましたらお知らせ下さい。取材に伺います。本紙発行費は会員の会費で賄われております。ご寄付は勿論大歓迎ですが、寄付者様には何のメリットもございません。但し本紙に御芳名を掲載し、敬意と謝意を表させていただきます。『白神の夢』に関するご質問等何なりとお尋ね下さい。

紙上花見大会



弘前城の見事な桜

撮影 = 白取 則明

今号は記事の量が多く4面構成にしたのだが、見出し作成や紙面の割り付けなどにかなりてこずったため発行が大幅に遅れてしまった。編集に追われている時は景色を眺める余裕などなくとも花見どころではなかったが、ようやく長いトンネルを抜け出した今どこかへ出掛けたくてウズウズしている。(奈良 沙冬子)

『白神の夢』と文化を育む会

連絡先 〒018-2641 秋田県山本郡八森町字中浜 51-3

☎ (FAX 兼) 0185-77-2221

奈良沙冬子 ✉ satoko-n@shirakami.or.jp